研究概要報告書【音楽振興部門】

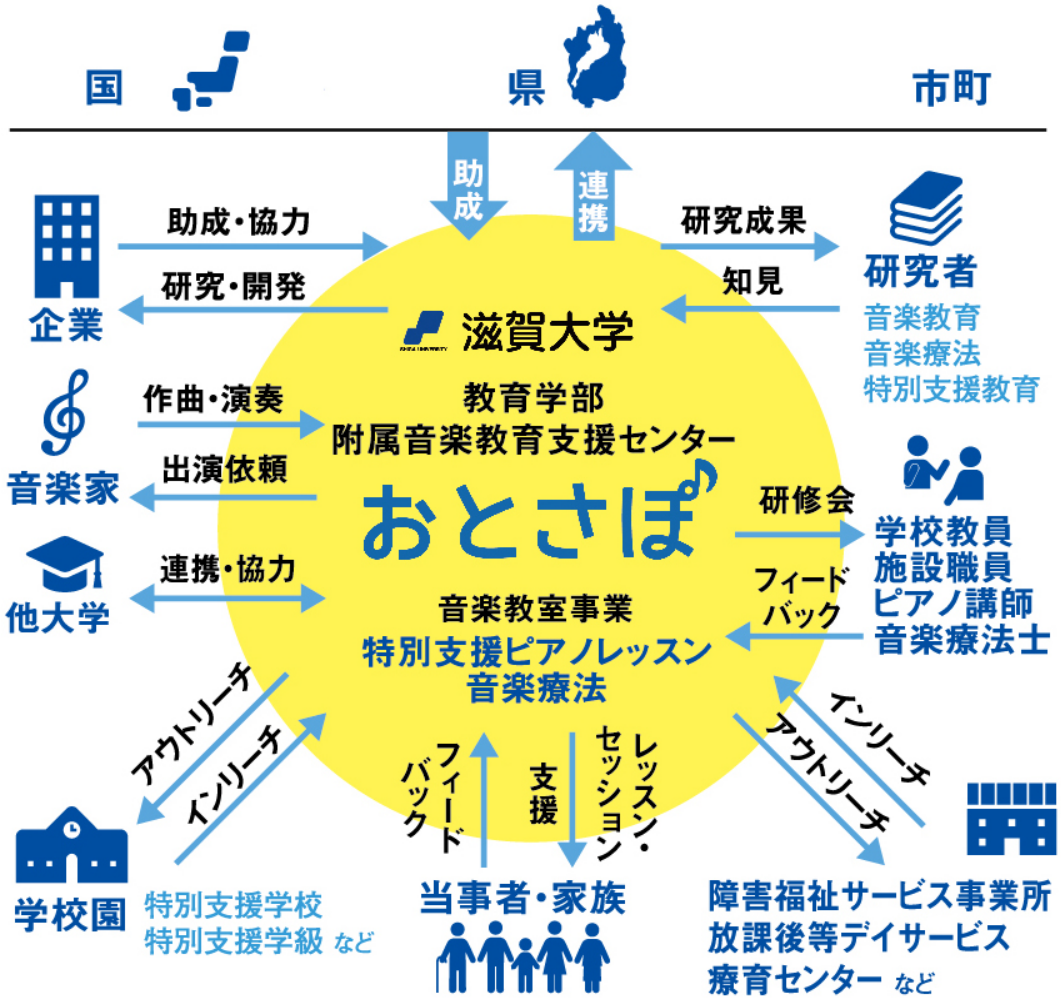
研究題目	障害児者を対象とした音楽アウトリーチの実践的研究	報告書作成者	林　睦
研究従事者	林　睦　山本 知香		
研究目的	障害児者を対象とした音楽アウトリーチのプログラム研究を行い、その成果を公表し、音楽機関・音楽団体や音楽家に寄与することを目的とする。なお、「音楽アウトリーチ」とは、当事者のところへ出向いてコンサートやワークショップを行ったり、一緒に音楽活動したりすることを指す。 2018 年に「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が公布，施行され、文化庁や厚生労働書も障害者の文化芸術への支援や文化芸術を通して共生社会を目指すプロジェクトなどが盛んにおこなわれている。本研究では、障害児者を対象とした音楽アウトリーチの方法について、実際に特別支援学校や障害者福祉事業所などに出向いて音楽アウトリーチを実践しながら、そのコツやノウハウなどを研究し、成果を公表する。なお、研究申請者と共同研究者は、2020 年 10 月に設立された滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター（愛称：おとさぽ）という障害児者を対象とした音楽教育のセンターに所属しており、センターの活動として障害児者を対象とした音楽アウトリーチを実践している。 多様性の時代に、障害児者を対象に、または障害児者とともに音楽活動をする機会も増えてきていると思われるので、障害児者を対象とした音楽のアウトリーチ活動のコツやノウハウなどを研究成果として公表することにより、音楽機関や団体、音楽家に寄与できると考える。本研究では、音楽分野において、障害児者を対象としたアウトリーチの状況調査や事例報告に留まらず、そこから一歩踏み込んで、実際に障害児者を対象としたアウトリーチプログラムの内容や実施方法について、音楽家と参加者の交流や音楽教育的な意義や効果にまで踏み込んで研究したいと考えている。		

研究内容	研究内容の要点は以下のとおりである。 ① 音楽アウトリーチとは 音楽の教育普及活動のこと。現場へ出向いて音楽を届けたり、聴衆とのコミュニケーションを工夫したりすることが特徴である。 →本研究では、滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター「おとさぽ」での　障害児者を対象とした音楽アウトリーチの実践を対象 ② 滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター「おとさぽ」とは 2020 年 10 月に滋賀大学教育学部に、障害児者の音楽教育を目的に寄附により設立されたセンター。1. アウトリーチ事業、2. インリーチ事業、3. 指導者研修会・ワークショップ、4. 先端研究・パイロットプログラムから成る。このうち、アウトリーチ事業は、特別支援学校や特別支援学級に、音楽教育支援センター所属教職員や連携する音楽家を派遣して、音楽教育や音楽療法のプログラムを提供する。学校だけでなく、障害者の就労支援施設、放課後等デイサービスなどにも出向き、音楽活動を支援する。おとさぽのアウトリーチの特徴は、オーダーメイドを基本としていることで、音楽で利用者の多様なニーズや希望を実現することを目指している。センターの普及実績は、令和3年度:21 事業に参加者 1081 人、令和4年度:23 事業に 947 人であった。(おとさぽの事業体制図を説明書ページに掲載) ③ おとさぽアウトリーチの分類 センターで実践しているアウトリーチを分類すると、下記の4つになる。 1. コンサート型 2. ワークショップ型 3. 授業支援型 4. 音楽療法型 ④障害児者を対象とした音楽アウトリーチのコツ 1. オーダーメイドプログラムの提供→ニーズや希望に寄り添う 2. 体験用楽器の用意など、体験できる工夫を 3. 学校の授業とも連動、教師も学べる機会に 4. 音楽療法型は、音楽に子どもを合わせるのではなく、子どもに音楽を合わせる (※おとさぽのアウトリーチの様子は、説明書ページに写真を掲載)

研究概要報告書 【音楽振興部門】

研究のポイント	障害児者を対象とした音楽アウトリーチの分類 （※滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター「おとさぽ」の場合） ①コンサート型 ②ワークショップ型 ③授業支援型 ④音楽療法型 これらの分類をもとに実践を進め、障害児者を対象とした音楽アウトリーチのコツやノウハウを考察した。
研究結果	障害児者を対象とした音楽アウトリーチのコツ ① オーダーメイドプログラムの提供でニーズや希望に寄り添うこと 多様なニーズや希望に寄り添う。そのためには、丁寧に打ち合わせをし、参加者の状況や希望を聞き取り、どのようにしたらひとり一人が楽しめるかを考え、さまざまや配慮や工夫をする。 ② 体験用の楽器の用意や体験できる場づくり、演奏者の配置など、充実した体験ができる工夫を 演奏者や補助者と一緒に楽器を体験できるようにする、体験する時の場の組み方や体験用の楽器を演奏者の楽器とは別に用意する、各楽器に配する参加者と演奏者の人数比、コミュニケーションの仕方などを工夫するこよによって、演奏者と参加者との距離がぐっと縮まる。 ③ 学校の授業とも連動、教師とコラボし、教師も学べる機会に 授業支援型のアウトリーチでは、授業に音楽家が入るかたちだが、音楽家にお任せではなくて、授業の内容を先生と音楽家が話し合って流れを決めたり、先生と音楽家がコラボして授業を進めたりすると学びが深まる。先生も一緒に授業をすることで音楽家から学び、後の授業に活かすことも目指す。 ④ 音楽療法型は、音楽に子どもを合わせるのでは なく、子どもに音楽を合わせて表現を引き出す 音楽療法型アウトリーチでは、音楽に子どもを合わせようとするのではなく、子どもに音楽を合わせようとしていくところに、音楽療法型アウトリーチの特徴がある。このような自己表現やコミュニケーションに重点を置いた音楽体験は、また違った角度から子どもの育ちをサポートすることにつながると考えられる。
今後の課題	研究から見えてきた障害児者を対象とした音楽アウトリーチのコツをもとに、今後も滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター「おとさぽ」の活動を通して、さらに研究を深め、新たなプログラムを制作していきたい。

【おとさぽ事業体制図】



【アウトリーチの様子】